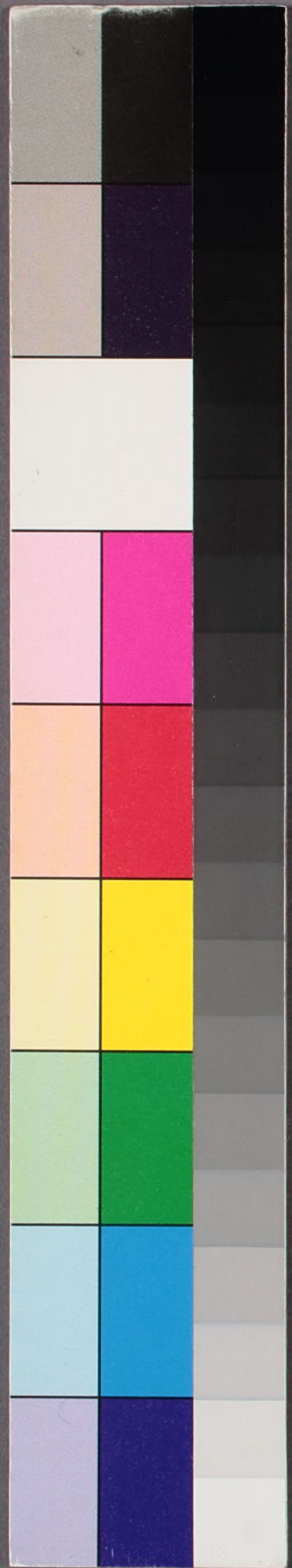


朝夷巡嶋記

第五編  
卷二

13  
704  
22





門  
號  
卷



三六  
年  
十月九日  
購

|                              |                                  |
|------------------------------|----------------------------------|
| スヘルリング 獨學 一冊<br>日本書記         | 神代卷 一冊<br>行假名付<br>小本二冊           |
| 第リートル 獨學 一冊<br>言田先生著         | 地方大概集 一冊<br>藤高文先生著<br>自初編至四編各五冊定 |
| 皇朝戰畧編 八冊<br>言田先生著            | 金銀圖録 八冊<br>近藤先生著<br>杉色へ<br>全七冊   |
| 小學素讀本 二冊<br>學校專用改点<br>森先生著   | 横文字獨替古 一冊<br>折本<br>書冊            |
| 洋算学そん 一冊<br>森先生著             | 名西洋美術早 一冊<br>折本<br>書冊            |
| 叢書肆 一冊<br>大阪心齋橋橋筋<br>妙久實寺村南入 | 前川源七郎梓 一冊<br>折本<br>書冊            |

朝夷巡嶋記全傳第五編卷之二

東都 曲亭主人編輯

後輯第四三

驟雨の長唐櫃  
新関の小袋阪

再說鎌倉の執權北條時政の曩小巳ととほど經任誅伐の大將は光仲を  
 擧用して陸奥へ遣せしめられたるが、此の頃、彼地より軍の注進  
 あり、毎よ寄る一戦より勝て、暴道時夏が楯籠り、鎮守府の城を  
 せしとつくと、此の竊は嘆息をよめる、絶く歡ぶ氣色や、又賊軍より  
 戦ひよ寄る、士卒夥撃し、鎮守府を退却せしむる戦ひの箇様と報  
 せしが、小藤と鼓をたたく、これをもあはれむる、秋彼經任が如術は  
 光仲の克く、あらん廣綱の持腐り、雷上藤の弓箭と頼む、粟の穂よ  
 小鳥と追ふ



案山子ありな浅きなるはやどく外人と代りてと光仲と召えん可  
 士卒と喪之へ意を慙やと咳く程は第三度の注進あり光仲奇計と廻して  
 経任が大軍と只一舉に討走り逃ゆと追々平泉を柵を圍て犄角と  
 せり御方は破竹の勢ひあり賊徒の誅滅速くとと詳詳に報しう  
 時政は又欽びとあつらん光仲奴が大功と立りせんがれ又その中か言を  
 飾りて功を誇る偽もあつたやの腹心のものと遣てとての勝負と白地  
 ありしもがれと受ども年来不便のありしほり近く使ゆる湯嶋湍太郎  
 基連といふ壮俊のいぬる建久四年の秋刀野藤杖照時と相撃て當坐し命を  
 隕し湯嶋木工進基勝が子なり渠ををハハる機密と委ぬるはもの  
 なるこの二月の下澁渠ハ助の痛むとく且く身の暇を乞つ伊豆の北條へ  
 退りし修善寺に赴きて湯治志死をこと飲りて瘡り果ねを立入る

ねこれれも亦今とて夏の要中を治さば義時意中を告て竊に相譚を  
 せんと親の心と子の志を渠の初より光仲と長負のふまより陸奥を  
 軍の注進あり毎小寄の克ぬと受けが歡びく光仲と譽ると甚し又賊軍  
 捷し乗と受けが氣を屈し頭と低くのなれば是も子孫のその胸臆を掃り  
 ころしつふせと額と病て春も三月と卒く暮る四月の末も報す  
 寄の士卒大なるは時疫ありて取りこれより且く虎口を解  
 退けて愈ふと俟とせしむ時政聊慰めくさしとあつた巨細  
 ありし程は五月よりぬこの月の上澁佐味並内高利ハ下河邊  
 小三郎高吉とぬる陸奥よりぬる高利ハ光仲の武功士卒の忠戦及義秀の  
 武略勇敢義邦主後武詮昌之が義は仗を恥と雪ゆる事の趣とを  
 下河邊高吉ハ光仲の呈書と献りて齎しる賊徒の首と実檢し備へる下



執權時政のこの子義時大江廣元三善入道善信と共に同註所の列坐して高利  
 高吉と局中より召入れの光仲の呈書を披見し高利高吉がその九件の  
 趣をばくしとて冷笑ひあつて賊徒の誅滅に不慮の資よあれぬ先仲廣綱の  
 功中をわぬなむとみづら羞をぬく他の功を盗入るや且賊の兵糧を土民に  
 配分して竊まはが恩と被け或は厨川の柵を焼亡して物ひらぐふ齋せぬや  
 ともあつたぬと死して賊の重器と私せんともあつた柵を燔たる民の賄賂を  
 貪りて彼兵糧を散せ飲これ亦あつたぬとあつた内何の爲は陸奥赴た  
 る軍監の名をわくわく知り光仲が不義の初めを禁むるは亦是同  
 腹衷中て必私慾あつたぬ賊徒の誅伏あつたぬも賊の罪あつたぬの  
 免ふ死かとの陳びる有り也と詰問れて高利の些も怯まぬ小膝を進めを  
 執権の口つら宣ふ死かとも免ふ死かとも何と澄扱せせむやん六郡の民の

と来賊乱は零落をうる任竟は七びに復天つ日とると歡び平泉の  
 柵中より落せし賊を追ふ或は生拘り或は首級と齎し厨方の陣へ  
 めの多うり光仲これと賞せんとも任任が盜貯る兵糧を散せ又厨川の賊徒  
 誅伏の後より柵を燔るや御方は士卒多うり柵をわく彼処を守りて  
 とくち捨ちる賊の殘黨再び聚合して奪取してわわん國家のめんを  
 要ねたのあり焼たぬまはしとて杖云は計ひあつたぬも厨川賊の重器  
 少うびあつたぬ彼此を離散せし郡司莊官を招き集りその財宝の悉光仲は親  
 これと封し且く渠ホは領けつたぬと下知を俟べと告げしは又厨川を  
 兵糧を百姓に取せし彼地の農民賊乱より作の便宜を失ひ飢渴の  
 臨むるのなりあつたぬとてあつたぬとて賑ふとて賑ふの窮を救ひし原  
 彼任が積貯る兵糧の土民の脂膏を盗るの今これとて彼飢渴を極むる



あべくは延上のん慈悲を預け美かれごとく柳宮の恩澤を百姓們は告  
 示しく形如く計ひぬれ某の才短くもあてせざる一且ハ賑給をあるべし  
 と禁やしども既中光仲の議せ趣件如しと理りよせぬればその意は  
 任ひなり彼人何ぞ不義あるべき然ると今執権ハ推量ともし疑ひぬれ  
 ぬれぬれと恨を合しつひ解る心は高吉に進む且つ平泉と火攻  
 しく今く徑任と討捕りしハ彼朝夷の援に依れども光仲あつく小勢とて大敵と  
 拉地内外よりこれと攻め朝夷の武勇捷れるも独り功と立ちかえり況  
 廣綱ハ鎮守府の城をとり守り國府より送らる一其糧を調達し摘角の  
 勢はと助けし兩將の功多しゆやあれども廣綱ハ光仲ハその功は誇らば  
 人の忠勇武功ハ載る呈書よんは何と云ふをかせし中ん他の功と益は飲と  
 疑ふも武士の恥辱あるや也死を凱陣の日と俟く誰と問せぬ物  
 づもいごとと憚る氣色もなく答ふ時政怒胸は満く誣んとは小辞を獲む  
 ぬらも大息を頻に左右とえりそのと義時微笑く軍監使者の  
 せ趣然あるべきや外廷の格式も大将既外ありてハ勅命も俟せり  
 賊の采穀を多く散く餓る民を救ひ仁なり後の禍をせり討川の柵を  
 燔らハ智ありそのさく道理は稱へられ禁めぬも軍監の罪  
 わたしんや又義秀義邦の大義大勇も他士卒の績ハ別翰に載り精細  
 光仲の私にたすあもを多く知る死飲と憚あるとあれども大人ハ推量  
 かれハ夏の虚と実ハ目今あは議はくくどその凱陣の日とあは賞罰ハ時  
 あり各位のつちを問れる廣元善信一城よ及び遠州の時政速慮も由なれ  
 わねど相州の意見も後々ハ首実檢をせり例は任り由井  
 濱は梟のさうめと言葉はしく執成り衆議をなす一決する時政ハ言の

あべくは延上のん慈悲を預け美かれごとく柳宮の恩澤を百姓們は告  
 示しく形如く計ひぬれ某の才短くもあてせざる一且ハ賑給をあるべし  
 と禁やしども既中光仲の議せ趣件如しと理りよせぬればその意は  
 任ひなり彼人何ぞ不義あるべき然ると今執権ハ推量ともし疑ひぬれ  
 ぬれぬれと恨を合しつひ解る心は高吉に進む且つ平泉と火攻  
 しく今く徑任と討捕りしハ彼朝夷の援に依れども光仲あつく小勢とて大敵と  
 拉地内外よりこれと攻め朝夷の武勇捷れるも独り功と立ちかえり況  
 廣綱ハ鎮守府の城をとり守り國府より送らる一其糧を調達し摘角の  
 勢はと助けし兩將の功多しゆやあれども廣綱ハ光仲ハその功は誇らば  
 人の忠勇武功ハ載る呈書よんは何と云ふをかせし中ん他の功と益は飲と  
 疑ふも武士の恥辱あるや也死を凱陣の日と俟く誰と問せぬ物  
 づもいごとと憚る氣色もなく答ふ時政怒胸は満く誣んとは小辞を獲む  
 ぬらも大息を頻に左右とえりそのと義時微笑く軍監使者の  
 せ趣然あるべきや外廷の格式も大将既外ありてハ勅命も俟せり  
 賊の采穀を多く散く餓る民を救ひ仁なり後の禍をせり討川の柵を  
 燔らハ智ありそのさく道理は稱へられ禁めぬも軍監の罪  
 わたしんや又義秀義邦の大義大勇も他士卒の績ハ別翰に載り精細  
 光仲の私にたすあもを多く知る死飲と憚あるとあれども大人ハ推量  
 かれハ夏の虚と実ハ目今あは議はくくどその凱陣の日とあは賞罰ハ時  
 あり各位のつちを問れる廣元善信一城よ及び遠州の時政速慮も由なれ  
 わねど相州の意見も後々ハ首実檢をせり例は任り由井  
 濱は梟のさうめと言葉はしく執成り衆議をなす一決する時政ハ言の



行れども氣色をゆるげ既まかの如くなりとも光仲の凱陣せし事此真  
 偽も定ぬぬは首実檢を急ぐの要を齎し首級は且く笠内は預けり  
 宿所は退りて光仲ホガむり事日と俟べし又下河邊小三郎ハ軍監は就く旅宿  
 せよ光仲凱陣して後よともむれん沙汰わんとも退り公使と嚴まひ知て僅か  
 暇と取せよ高利も高吉も送し面をありてかまき兵衛軍と共に凱陣せり  
 悔れどもをさるともあつてせよ高利ハ高吉と相く外は出り  
 經任時夏ホガ首級と舊のどく扛擔して馳て宿所はせりしと妻子をれは首級  
 訪慰るものもあつて五月も半過れども出仕せしと沙汰わんこの故は高吉も始り  
 苦しく高利と相譚あつて執権のつとを主は報をせよ歸郎の暇をせり  
 まれば心もあつて奴隷などを使して路次をせりしとあつて云々  
 つと日と俟る主の帰陣を俟りて程は多賀藏人光仲ハ義邦夫婦と相

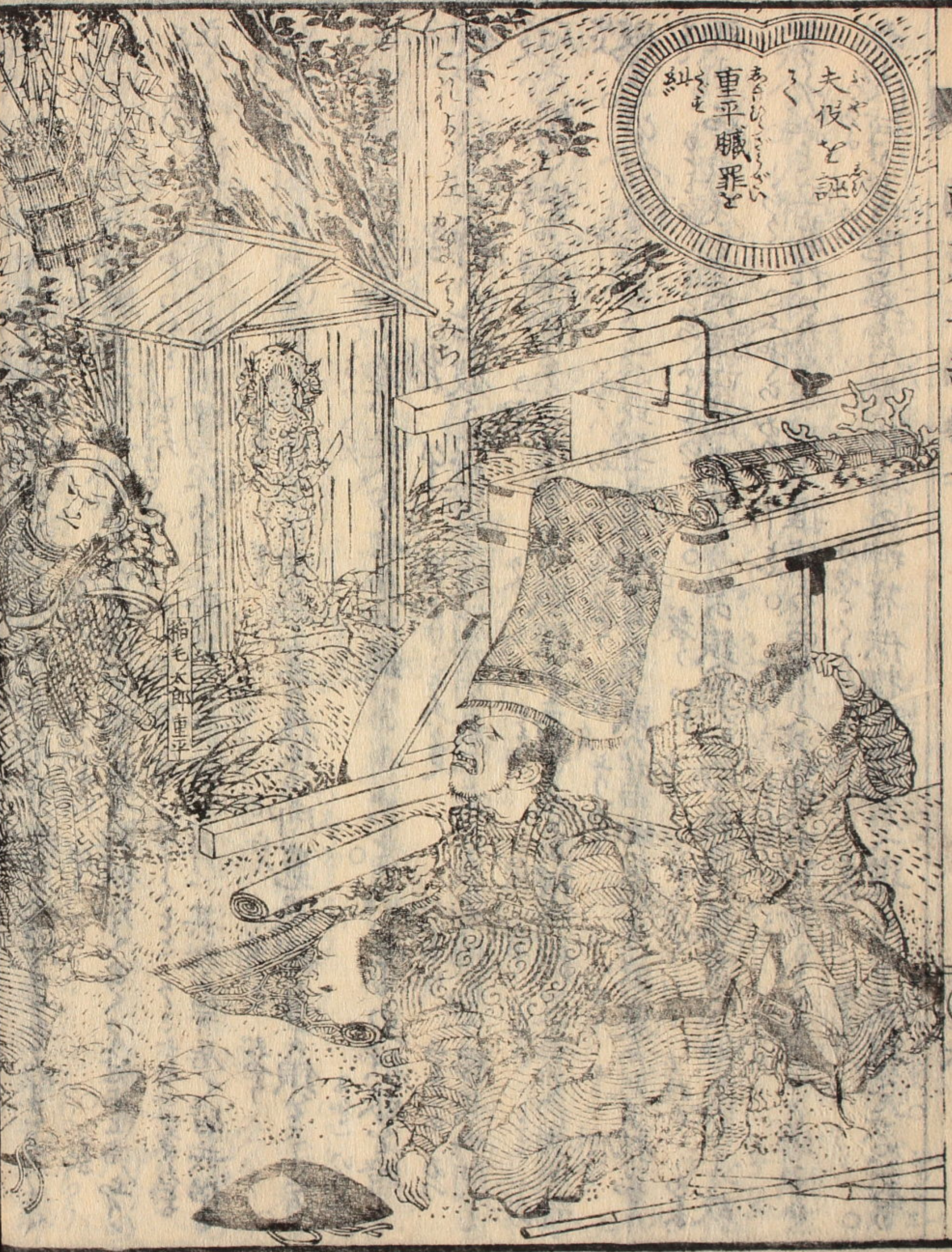
伴く頼人馬と急ぐ五月廿日小稍鎌倉へ近つたぬこの朝光仲ハ相摸路を  
 程は相後ハ軍兵と過半後陣は退けし士卒は百騎許み身甲のせり  
 弓矢法と張る甲冑ハ幾箇も長唐櫃は納りて鞍の夫役は早しり既わ  
 岩瀬村の西南ハ離山にあつて来るつと曇り日の道は滑り五月の天は  
 癖をれは忽地暗く多も驟雨は降るは甚なり見陰を夫役ハこれ慌  
 忙しめこの件の長唐櫃と樹下へ早をんと稻塚とうち倒し夏草を踏乱し  
 衆人罵駈ぐ折るこれ亦長唐櫃と四箇をり扛擔せし一個の宰領は附か  
 邊を過るは人々この夫役ハ彼長櫃は必しも長櫃の稜をせりし中を  
 些破りし件の宰領駭死怒りてあつて狼藉も奴原にこれハ將軍家の御徒と  
 稟る年と五月は乞祈禱の神符供物と献る何れの院の長櫃あるは破り  
 こそ非道なれど鎌倉へ走るはこれこの趣をせよ長櫃ハ四あつて汝ホ小



細毛四郎重成北條時政の婿この時既に初編に足る

預けし衆皆末中と敷園と飛ぶごとく走去れらるる。應も果はる二隊  
 八九人長唐櫃とち捨て走りてをたふり夫役はこれ駭き追留て勸解を  
 ちふ一致せられ竟て及ばぬ食ち聚會し相禪し鎌倉殿へ進らば神符の長櫃  
 ありとて拾われうとて置れ且これとて櫓中多賀殿よりあかん  
 俗は重荷と重附とのまかんを吐き替りの此八九人諸肩入れて早起は  
 びりより甚重うとのと既雨を霽き蕃山の裾を西目と風涼しくあれ衆皆  
 只管急げど光仲の雨追れ馬の足搔とありと輒く追つてくもあつた  
 さりとて後陣の事も續を送る焦燥罵りあつく足並取次走りなり浩処に  
 身甲をる一個の武士後者十人ありとて追次の教諭の蔭より光仲の  
 夫役と逸留められ軍役們且等と光仲の長櫃を鎌倉城内の  
 肥近細毛四郎重成が家男北條殿の爲外孫市の別當と奉る細毛太郎  
 重平ありがこれ將軍家の密諜と受とありて穿鑿せたりとありとて  
 この処は出通の御教書ありありその長櫃と悉蓋う披せとて吉  
 立ち呼被れば夫役亦再び驚れ三十餘箇の長櫃と存一其処は昇居て皆共侶  
 跪れ仰りけりぬぬ甲冑と衣裳の事あれども御覽は櫃毎に鎖とて  
 多賀殿の隊兵とて遣ふ先へもせり鍵はあつたといせり又灰眼と燈  
 鍵をれが許えや披う披けと敷園の用意とあり稲毛が夥兵小阿と  
 応とあつく曹と排する大蛇とある鐵槌と居やと櫃の鎖と蓋り共打  
 破りしは推してふ或は士卒の甲冑あり或は舊垢つたる衣裳の物あり  
 既にもも最後は長櫃四箇送りこの鎖の大蛇と封度とあり怪し故  
 ありとて立蒐れば夫役亦睜と推禁めあり道中と昇りてありの事や  
 あり何れの院とせん久祈禱の神符供物と鎌倉へ進らば長櫃とあり





夫役と誣  
重平賊罪と  
糾と

これより左かきみちみち

相毛太郎重平







おん沙汰を願ふとをいへと辞ひとく哀を告ぐと重平は彼の果を呵くと  
 冷笑ひ汝も言と巧もものいもその物と巧も神符慶備の長櫃のその  
 僧坊の寺号山号。昭々書つけく會符と立てもあてはこれに彼も皆相似り又  
 何の院の僧坊へ絶く諸國あるをわたりて寺号をもつて定む敵も二人も  
 留め陳れんがと誰の信人皆縛んで觀念せよと飽もよ罵責く前を捉  
 ち招け稲毛が夥兵奴隷は彼此より走り聚ふ又教のそをわをた八十  
 餘人の夫役ホと一人も漏るは搦捕す珠教繫たれ追立れば重平は奴隷  
 ホも三千餘箇の長櫃とこれも漏るは早し中彼四箇と真先は推立くと  
 勇一は走り去り光仲はかとも知らず驟雨と乗ぬんと馬の足撥をとも  
 ぬくと十町あつりて天のそく晴し長唐櫃と昇し歩卒は道なき  
 べし後陣をも俟合くと吉見殿も共は鎌倉へ入らんと程は平垣に駐る馬  
 より下りて床几と立さし且く尻をかちる拍り一個の夫役泥を踢立ち喘ぎ走り  
 きの會釋もぬせは大将のほりも近つて左右は侍りける武隆昌之ホは  
 うち對ひく遠く顔とつれ小人の長唐櫃の肩代をせし夫役もあつる響は雨多し  
 比途多く不慮の事起りて走り夥計の夫役ホ稲毛太郎重平ぬは矢庭に搦捕  
 られりその故は箇様くと驟雨を避る驟は謬く彼外の長櫃を破りし初より  
 自他の長櫃と遠もぬく重平は打扱れそのも此終りぬせしと報て汗抄し  
 拭ひ小人の拍も敗る草鞋と更と二町あり後れはきひし縛の事と  
 脱れりこれに間道より潜るは後のそよ近つて一足高た夏草の繁た下ふ  
 躰はく稲毛殿の情を証罔を竊聞つたて件の後者も此より聚合を  
 ぶが長櫃も彼長櫃も奪りて存一早起し生拘りる軍役共を頻り追立馳  
 立く鎌倉のそよあつる道引ちりて走りぬればあつる道のそよを過る



いたれば。○あやや。○彼の禍は。○あつた。○他の長棍。○是昇起せし。○怒り。○走り。○  
 し。○とまらぬ。○雨。○天。○は。○あつた。○神符。○供物。○といはれ。○椀。○すり。○金銀。○巻。○絹。○調。○度。○の。○  
 野。○出。○は。○あつた。○い。○を。○これ。○の。○趣。○を。○報。○ま。○さん。○と。○あ。○ひ。○し。○面。○を。○あ。○る。○阿。○谷。○と。○  
 死。○迹。○を。○慕。○ひ。○あ。○る。○く。○く。○推。○系。○つ。○あ。○る。○ね。○倅。○詳。○を。○告。○る。○あ。○ん。○武。○詮。○も。○昌。○之。○も。○是。○れ。○  
 へ。○の。○之。○辯。○の。○も。○あ。○る。○と。○く。○驚。○嘆。○を。○ら。○る。○光。○仲。○これ。○を。○あ。○ま。○く。○悵。○然。○と。○く。○眉。○を。○  
 擡。○め。○ゆ。○り。○あ。○る。○と。○く。○仲。○と。○く。○憎。○み。○あ。○る。○と。○く。○陥。○ん。○と。○伎。○倆。○あ。○る。○ん。○や。○異。○変。○の。○事。○  
 あり。○とも。○入。○る。○事。○あ。○る。○と。○く。○好。○む。○互。○も。○光。○仲。○が。○身。○を。○あ。○ま。○く。○あ。○ん。○ぢ。○ん。○陸。○奥。○ま。○わ。○い。○  
 日。○三。○月。○の。○戦。○ひ。○士。○卒。○軍。○令。○を。○守。○り。○く。○務。○あ。○る。○め。○あ。○る。○り。○一。○功。○成。○く。○師。○を。○  
 欠。○く。○多。○鎌。○倉。○へ。○入。○途。○あ。○る。○被。○禍。○と。○釀。○せ。○し。○歩。○卒。○ホ。○罪。○か。○只。○一。○日。○路。○の。○程。○か。○ら。○  
 何。○の。○あ。○ん。○と。○言。○易。○も。○あ。○る。○と。○く。○あ。○る。○と。○く。○地。○る。○老。○兵。○夥。○宰。○領。○を。○隸。○べ。○り。○い。○ぬ。○  
 油。○断。○し。○く。○用。○意。○を。○せ。○び。○騰。○轡。○而。○追。○れ。○り。○馬。○と。○走。○り。○く。○後。○方。○ま。○り。○た。○り。○  
 と。○も。○あ。○る。○り。○一。○ハ。○思。○慮。○足。○ら。○ぬ。○光。○仲。○が。○怒。○り。○あ。○る。○ん。○又。○猶。○豫。○あ。○る。○と。○く。○鎌。○倉。○の。○  
 歸。○陣。○し。○て。○事。○の。○次第。○を。○あ。○る。○鮮。○太。○郎。○五。○ハ。○後。○陣。○を。○退。○り。○く。○件。○の。○事。○と。○吉。○見。○殿。○は。○竊。○し。○  
 告。○あ。○る。○一。○ハ。○軍。○兵。○ハ。○二。○ツ。○の。○処。○は。○留。○止。○せ。○れ。○四。○郎。○ハ。○後。○陣。○を。○あ。○れ。○合。○し。○て。○二。○隊。○を。○  
 拍。○ぐ。○徐。○に。○来。○よ。○あ。○る。○ゆ。○り。○耶。○と。○解。○諭。○せ。○び。○武。○詮。○頭。○を。○傾。○け。○つ。○り。○紫。○の。○怪。○し。○た。○  
 子の。○あ。○り。○と。○あ。○る。○急。○に。○柳。○營。○を。○あ。○り。○ぬ。○吉。○凶。○の。○事。○を。○あ。○る。○と。○く。○い。○ん。○ぬ。○の。○隊。○ハ。○百。○  
 騎。○足。○ら。○ぬ。○を。○れ。○も。○過。○半。○送。○し。○ぬ。○非。○常。○の。○事。○の。○あ。○ん。○と。○死。○誰。○う。○の。○仇。○と。○は。○誰。○か。○  
 死。○身。○子。○代。○に。○死。○批。○策。○ハ。○也。○ども。○暴。○は。○病。○疴。○後。○を。○と。○披。○露。○し。○く。○且。○く。○この。○は。○どう。○ゆ。○り。○  
 又。○某。○使。○者。○と。○し。○く。○執。○権。○の。○郎。○を。○赴。○死。○竊。○し。○氣。○色。○を。○窺。○ハ。○便。○り。○を。○あ。○る。○と。○く。○この。○残。○ハ。○  
 亡。○と。○是。○其。○ハ。○光。○仲。○頭。○と。○う。○掉。○し。○と。○は。○か。○や。○と。○大。○く。○違。○へ。○り。○詭。○者。○の。○あ。○る。○誣。○ら。○れ。○て。○既。○ハ。○  
 罪。○を。○ぬ。○ん。○ん。○後。○陣。○を。○合。○し。○く。○あ。○る。○も。○身。○を。○護。○ら。○ず。○足。○ら。○ぬ。○や。○い。○ん。○身。○の。○仇。○を。○防。○ん。○  
 と。○も。○や。○兵。○権。○と。○解。○む。○も。○あ。○る。○非。○常。○の。○事。○は。○あ。○ん。○と。○死。○士。○卒。○怒。○り。○く。○戦。○ん。○あ。○る。○ん。○也。○

いたれば。○あやや。○彼の禍は。○あつた。○他の長棍。○是昇起せし。○怒り。○走り。○  
 し。○とまらぬ。○雨。○天。○は。○あつた。○神符。○供物。○といはれ。○椀。○すり。○金銀。○巻。○絹。○調。○度。○の。○  
 野。○出。○は。○あつた。○い。○を。○これ。○の。○趣。○を。○報。○ま。○さん。○と。○あ。○ひ。○し。○面。○を。○あ。○る。○阿。○谷。○と。○  
 死。○迹。○を。○慕。○ひ。○あ。○る。○く。○く。○推。○系。○つ。○あ。○る。○ね。○倅。○詳。○を。○告。○る。○あ。○ん。○武。○詮。○も。○昌。○之。○も。○是。○れ。○  
 へ。○の。○之。○辯。○の。○も。○あ。○る。○と。○く。○驚。○嘆。○を。○ら。○る。○光。○仲。○これ。○を。○あ。○ま。○く。○悵。○然。○と。○く。○眉。○を。○  
 擡。○め。○ゆ。○り。○あ。○る。○と。○く。○仲。○と。○く。○憎。○み。○あ。○る。○と。○く。○陥。○ん。○と。○伎。○倆。○あ。○る。○ん。○や。○異。○変。○の。○事。○  
 あり。○とも。○入。○る。○事。○あ。○る。○と。○く。○好。○む。○互。○も。○光。○仲。○が。○身。○を。○あ。○ま。○く。○あ。○ん。○ぢ。○ん。○陸。○奥。○ま。○わ。○い。○  
 日。○三。○月。○の。○戦。○ひ。○士。○卒。○軍。○令。○を。○守。○り。○く。○務。○あ。○る。○め。○あ。○る。○り。○一。○功。○成。○く。○師。○を。○  
 欠。○く。○多。○鎌。○倉。○へ。○入。○途。○あ。○る。○被。○禍。○と。○釀。○せ。○し。○歩。○卒。○ホ。○罪。○か。○只。○一。○日。○路。○の。○程。○か。○ら。○  
 何。○の。○あ。○ん。○と。○言。○易。○も。○あ。○る。○と。○く。○あ。○る。○と。○く。○地。○る。○老。○兵。○夥。○宰。○領。○を。○隸。○べ。○り。○い。○ぬ。○  
 油。○断。○し。○く。○用。○意。○を。○せ。○び。○騰。○轡。○而。○追。○れ。○り。○馬。○と。○走。○り。○く。○後。○方。○ま。○り。○た。○り。○  
 と。○も。○あ。○る。○り。○一。○ハ。○思。○慮。○足。○ら。○ぬ。○光。○仲。○が。○怒。○り。○あ。○る。○ん。○又。○猶。○豫。○あ。○る。○と。○く。○鎌。○倉。○の。○  
 歸。○陣。○し。○て。○事。○の。○次第。○を。○あ。○る。○鮮。○太。○郎。○五。○ハ。○後。○陣。○を。○退。○り。○く。○件。○の。○事。○と。○吉。○見。○殿。○は。○竊。○し。○  
 告。○あ。○る。○一。○ハ。○軍。○兵。○ハ。○二。○ツ。○の。○処。○は。○留。○止。○せ。○れ。○四。○郎。○ハ。○後。○陣。○を。○あ。○れ。○合。○し。○て。○二。○隊。○を。○  
 拍。○ぐ。○徐。○に。○来。○よ。○あ。○る。○ゆ。○り。○耶。○と。○解。○諭。○せ。○び。○武。○詮。○頭。○を。○傾。○け。○つ。○り。○紫。○の。○怪。○し。○た。○  
 子の。○あ。○り。○と。○あ。○る。○急。○に。○柳。○營。○を。○あ。○り。○ぬ。○吉。○凶。○の。○事。○を。○あ。○る。○と。○く。○い。○ん。○ぬ。○の。○隊。○ハ。○百。○  
 騎。○足。○ら。○ぬ。○を。○れ。○も。○過。○半。○送。○し。○ぬ。○非。○常。○の。○事。○の。○あ。○ん。○と。○死。○誰。○う。○の。○仇。○と。○は。○誰。○か。○  
 死。○身。○子。○代。○に。○死。○批。○策。○ハ。○也。○ども。○暴。○は。○病。○疴。○後。○を。○と。○披。○露。○し。○く。○且。○く。○この。○は。○どう。○ゆ。○り。○  
 又。○某。○使。○者。○と。○し。○く。○執。○権。○の。○郎。○を。○赴。○死。○竊。○し。○氣。○色。○を。○窺。○ハ。○便。○り。○を。○あ。○る。○と。○く。○この。○残。○ハ。○  
 亡。○と。○是。○其。○ハ。○光。○仲。○頭。○と。○う。○掉。○し。○と。○は。○か。○や。○と。○大。○く。○違。○へ。○り。○詭。○者。○の。○あ。○る。○誣。○ら。○れ。○て。○既。○ハ。○  
 罪。○を。○ぬ。○ん。○ん。○後。○陣。○を。○合。○し。○く。○あ。○る。○も。○身。○を。○護。○ら。○ず。○足。○ら。○ぬ。○や。○い。○ん。○身。○の。○仇。○を。○防。○ん。○  
 と。○も。○や。○兵。○権。○と。○解。○む。○も。○あ。○る。○非。○常。○の。○事。○は。○あ。○ん。○と。○死。○士。○卒。○怒。○り。○く。○戦。○ん。○あ。○る。○ん。○也。○



鎌倉殿より言と尋とこれが非寛枉な身を喪ふと且悪名と苗めが識者の  
 為に笑もん士卒とさうもく苗めがの猜疑を避んぬあり太郎五へとく後陣か  
 退りてこれのしを冠者も信へよとくとのそぐ立れども昌之いあや立もあつた  
 沈吟とくさのいあや初より大将の庇は立く君父の怨を復せしめ今あ  
 りの難美も及びく誰か一步も退くべ死且くあま坐を占め吉見殿も遠くは  
 追つたあまのいあやと推辞は光仲もあつた汝達ハ信夫の舊臣冠者の譜第  
 ちのいあやも選姫のうをさるるあまのいあやありて中守直下河邊高吉とて  
 老黨と彼此へ遣しこれの代は霎時この隊は諫するの光仲は義と立ち要  
 かてもしも意は任せぬと理り切く諭せども兩人いあやけりて宣せく吉見殿ハ  
 古主の塔君よりいあや等閑はあまのいあやさるるいあやありて何人ハ派  
 せられ彼君ハ年来の大望を果しぬれは是れおん身の安危ハ吉見殿の  
 浮沈ハ係れりいあやいあや忠と義の志ハおれどいあや枉く且く苗を更と辞  
 諫とバ光仲頻りに焦燥く先益の論議は時と移るバ後悔勝を啜むと  
 あん汝達ハ汝達の志をわくしこれのいあや意は任せぬとさういあや身は起と  
 馬は閃りとうち乗るく鎌倉を投ぐ走らされこのいあやをゆく諸軍共誰のいあや  
 この処は送り留らんといあやいあや死命後れどと走らあん武詮も昌之も又これ  
 又ハ禁ゆるいあや愆あんととせられ追つたあまのいあや進まらかりて程ハ光仲ハ騎  
 真光ハ進もく小袋坂まで事くえれば猛ハまをえら関のいあや素樸の城戸を圍  
 くれが心のいあや安くねど己とをいあや馬を降くこれハ多賀藏人あり陸奥  
 帰陣して柳營へあんと欲せこの城戸もいあやと高やふ呼々けり早と関  
 守の雜兵ハ角門と半開なる多賀殿のいあや牙もああり入り也とくくと  
 いあや光仲ハ後れる後者とあま暇あり引く隨ハ衝と入く四下を信と

月帳五編卷二



足さるゝ雑兵九三百人成の劔戟の聲を外し或は弓杖突立く齋とてひさう  
 當下割具足は臂鎧脚甲もる西個の武士進まゆ光仲も對ひ多賀藏入付  
 ありと見ん疑のまらあまの身を召進ま死首將軍家の台命と稟せり在柄  
 平太胤長仁田四郎忠常小関と守ま候と久し國法かれ腰刀とをさ入ると  
 嚴し命を借れ雑兵あま囚轡とをひつゝ早のりなり光仲は些も騷ぐ  
 けぬととて取ておんぢめを蒙えとさひひけの台命か非は及ぶと律のあま  
 氣色やく取ておんぢめを蒙えとさひひけの台命か非は及ぶと律のあま  
 計ひ多とさひひれは西刀とをさく轡も乗移る浩処は武詮昌之士卒雜  
 兵共侶は直走りもちの武詮昌之先は進ま城戸も破れとち敵たれば陸  
 奥の軍役は後なる共共し高あまを撃つと士卒溷雜しと道より入ひあり  
 多賀殿は後れりあけ開くと呼まは胤長裡向り声高やま其の兵共義れ  
 多賀光仲の罪あり囚徒とありと光仲かのとてかれが役は後めと候り  
 賞罰ハ沙汰は及ぶと故郷へかゝりか仰と受る在柄平太胤長  
 仁田四郎忠常ありあまゆる汝のやと仰天せるとあま衆皆腰と  
 うち援をて噫とむる散動たて嗟嘆の聲を合らうと中は武詮昌之を  
 送恨は堪ばとあり立光仲はけをるも逆賊退治の大將とありわその罪  
 あれごとく後者一人も許されぬのと朽とけりあまの故様はあまと再び  
 三つびの胤長とあま共共光仲との任重くとも囚徒とありと後者を許  
 しと俱るまぬと嚴命は依る所とが私に阻むとあり異議は及ぶ主共侶は獨  
 捕んどつとあま只穂便は退散せ其身の為の事と後日の沙汰も宣ふ  
 主の為とあまと退死と正首は諭とあまの後ハ音とせ武詮昌  
 齒と切く心さうの早れともよ許されぬ関あまの事とせんあま一圓あま  
 退れと冠着は其の趣と告あまをくともあまを咳たつあま彼

足さるゝ雑兵九三百人成の劔戟の聲を外し或は弓杖突立く齋とてひさう  
 當下割具足は臂鎧脚甲もる西個の武士進まゆ光仲も對ひ多賀藏入付  
 ありと見ん疑のまらあまの身を召進ま死首將軍家の台命と稟せり在柄  
 平太胤長仁田四郎忠常小関と守ま候と久し國法かれ腰刀とをさ入ると  
 嚴し命を借れ雑兵あま囚轡とをひつゝ早のりなり光仲は些も騷ぐ  
 けぬととて取ておんぢめを蒙えとさひひけの台命か非は及ぶと律のあま  
 氣色やく取ておんぢめを蒙えとさひひけの台命か非は及ぶと律のあま  
 計ひ多とさひひれは西刀とをさく轡も乗移る浩処は武詮昌之士卒雜  
 兵共侶は直走りもちの武詮昌之先は進ま城戸も破れとち敵たれば陸  
 奥の軍役は後なる共共し高あまを撃つと士卒溷雜しと道より入ひあり  
 多賀殿は後れりあけ開くと呼まは胤長裡向り声高やま其の兵共義れ  
 多賀光仲の罪あり囚徒とありと光仲かのとてかれが役は後めと候り  
 賞罰ハ沙汰は及ぶと故郷へかゝりか仰と受る在柄平太胤長  
 仁田四郎忠常ありあまゆる汝のやと仰天せるとあま衆皆腰と  
 うち援をて噫とむる散動たて嗟嘆の聲を合らうと中は武詮昌之を  
 送恨は堪ばとあり立光仲はけをるも逆賊退治の大將とありわその罪  
 あれごとく後者一人も許されぬのと朽とけりあまの故様はあまと再び  
 三つびの胤長とあま共共光仲との任重くとも囚徒とありと後者を許  
 しと俱るまぬと嚴命は依る所とが私に阻むとあり異議は及ぶ主共侶は獨  
 捕んどつとあま只穂便は退散せ其身の為の事と後日の沙汰も宣ふ  
 主の為とあまと退死と正首は諭とあまの後ハ音とせ武詮昌  
 齒と切く心さうの早れともよ許されぬ関あまの事とせんあま一圓あま  
 退れと冠着は其の趣と告あまをくともあまを咳たつあま彼



竊まらば相譚く衆共侶は引く足は運びも弱り果てゆきしものぞ我  
 ちの言見冠者義邦は道中後陣と告りて継忠は先立一蓮煙の廣光  
 葉二郎と傳けし後立し士卒雜兵陸續とて遙に前面より来りて武詮  
 昌之とて人々頻りに走り近づくを義邦ありは怪しく馬を駐りて侯程は西  
 人とも走り来て光仲の一人送るべく彼長櫃のより云云と告りて義邦  
 といきぞ然れども馬より降る路邊の小草の上は敷皮布しく廣光継忠は  
 招き集り彼凶變と告る程は関のより退死する士卒も其処は聚合して彼  
 告此は報れば後陣の士卒は死呆れ騒ぐと大にわらひ義邦は継忠しく  
 ありは亂雜と鎮むるやかく藏人と極めて死計策も欲得と議するは廣光継忠  
 葉二郎等も頻りに遠恨は堪えられ衆殘區々やうて夏果は義邦雲時  
 沈吟どく是裏はこれ萬死をゆく怨と報ひ恥を雪め夫婦主従再会の素懐と  
 其所は遂にうへこれ誰が恵とや只朝夷と多賀氏とこの兩雄の資もれり  
 ありは彼人軍功ありての賞をゆき諛者の為は中られ不測の罪と  
 地をんやと命運もあは場り何の了簡も及ぶ死義をゆくせしが男  
 ち。鶏鳴の客ありてはとも小袋坂の新聞守と流計りてもうち越て安危を  
 藏人と共せん嚮子桎尾を過りし折きのふけのいと暑は傍は壁壁の長途は悩  
 心地例やと笑えしは保養の為其処は憩ひて時を想ひては藏人小  
 づ後れ悔しく多し今も罪を離れ去るも再び諛者の誣りて罪  
 ち罪をゆきんや何國あり立潜るべきその義は背をれや父祖の名と  
 降まらばなら既に決せり長食錢の毎益ありては中をゆくは遠恨の眼  
 尻は涙を含めて必死と究めし當坐の決断日来や立まらば氣色雄々たる  
 一は廣光継忠武詮昌之四名齊一感激しくあるべしと応りて更な又議する







ひとし、立あがらふ今、夫役もなかりぬ、蓮姫の轎子の継忠と、葉二郎が辛く、  
 權起し、武詮昌之相助り、早に後、續けたり、さ程、義邦の、小袋坂、あまれば、  
 廣光の先、進んで、城戸を、敵に、声高、あつ、云云と、名告、ふれば、関の、雑兵、皆て、  
 吉見、殿、あつ、下、知、あり、軍兵、とも、ゆる、來、つ、秋、その、人数、い、ち、と、向、れて、廣光、  
 七人の、こ、ろ、中、は、女、儀、一、人、あり、即、冠、者、の、内、室、あり、あれ、ら、の、ゆ、と、あ、つ、と、言、語、  
 ち、川、う、呼、門、へ、雜、兵、小、の、志、と、答、て、あ、り、且、く、の、城、戸、を、開、く、は、の、と、れ、黃、昏、あり、  
 され、ば、在、柄、平、太、胤、長、の、雜、兵、は、兩、三、束、の、焦、火、と、照、さ、し、く、角、門、より、進、み、吉、見、  
 主、後、と、ま、ん、か、つ、を、ほ、り、近、く、立、對、ひ、吉、見、冠、者、へ、和、殿、あり、耶、多、賀、光、仲、罪、  
 あり、あ、つ、既、は、禁、獄、せ、れ、う、より、こ、の、軍、兵、と、逐、退、さ、せ、ぬ、ん、ら、某、小、の、付、  
 あり、こ、の、新、関、と、守、て、と、り、彼、義、邦、入、り、あ、つ、主、後、と、の、苗、措、た、速、く、あ、つ、  
 あり、こ、の、月、お、ん、下、知、と、俵、と、と、豫、り、沙、汰、せ、つ、あ、つ、ふ、冠、者、は、と、く、軍、兵、と、  
 離、散、せ、り、夫、婦、主、後、煥、は、七、人、ふ、り、弓、箭、と、合、ひ、て、從、者、の、鐔、長、刀、と、携、さ、  
 せ、り、か、の、と、り、め、り、あ、つ、れ、の、父、昔、の、稱、志、死、の、進、止、神、妙、あり、某、是、和、田、  
 左、衛、門、尉、義、盛、が、族、子、あり、和、田、の、在、柄、平、太、胤、長、と、か、併、あ、つ、入、り、あ、つ、と、  
 誘、引、あ、つ、あ、つ、義、邦、主、後、の、事、を、ひ、より、易、かり、た、と、僅、く、あ、つ、れ、様、平、と、  
 向、き、隨、ひ、姓、名、と、告、り、或、は、本、貫、來、由、と、報、く、引、れて、裡、面、入、り、あ、つ、か、つ、平、太、  
 胤、長、の、義、邦、夫、婦、主、後、と、関、の、守、屋、苗、措、く、夥、の、兵、よ、の、一、室、と、守、ら、の、あ、つ、  
 遣、り、あ、つ、こ、の、胤、長、の、情、を、侍、て、義、邦、夫、婦、從、者、を、と、勅、と、と、大、う、と、  
 け、り、の、割、菴、と、も、ち、膳、と、薦、り、く、長、途、の、疲、勞、を、慰、ふ、江、三、二、廣、光、の、  
 蒲、殿、は、仕、し、り、途、の、面、と、織、れ、が、これ、彼、空、谷、是、音、の、あ、つ、あり、これ、は、胤、長、の、

あり、こ、の、月、お、ん、下、知、と、俵、と、と、豫、り、沙、汰、せ、つ、あ、つ、ふ、冠、者、は、と、く、軍、兵、と、  
 離、散、せ、り、夫、婦、主、後、煥、は、七、人、ふ、り、弓、箭、と、合、ひ、て、從、者、の、鐔、長、刀、と、携、さ、  
 せ、り、か、の、と、り、め、り、あ、つ、れ、の、父、昔、の、稱、志、死、の、進、止、神、妙、あり、某、是、和、田、  
 左、衛、門、尉、義、盛、が、族、子、あり、和、田、の、在、柄、平、太、胤、長、と、か、併、あ、つ、入、り、あ、つ、と、  
 誘、引、あ、つ、あ、つ、義、邦、主、後、の、事、を、ひ、より、易、かり、た、と、僅、く、あ、つ、れ、様、平、と、  
 向、き、隨、ひ、姓、名、と、告、り、或、は、本、貫、來、由、と、報、く、引、れて、裡、面、入、り、あ、つ、か、つ、平、太、  
 胤、長、の、義、邦、夫、婦、主、後、と、関、の、守、屋、苗、措、く、夥、の、兵、よ、の、一、室、と、守、ら、の、あ、つ、  
 遣、り、あ、つ、こ、の、胤、長、の、情、を、侍、て、義、邦、夫、婦、從、者、を、と、勅、と、と、大、う、と、  
 け、り、の、割、菴、と、も、ち、膳、と、薦、り、く、長、途、の、疲、勞、を、慰、ふ、江、三、二、廣、光、の、  
 蒲、殿、は、仕、し、り、途、の、面、と、織、れ、が、これ、彼、空、谷、是、音、の、あ、つ、あり、これ、は、胤、長、の、





囚轆と守て  
 忠常  
 九多々々々々々  
 問註所へ赴く





義邦の素生と疑はば範頼の二子か白鳩丸ありし世上の風聞空しく  
あつたはあつた感嘆しき舊の事とていひつゝと懇に慰めても慰りし主従を只  
光仲のうらみとていひつゝとあつたはあつた明しき。

後輯第四十四  
尼御殿の流言  
衆議廳の讞獄

是より先は仁田四郎忠常の君命已とていひつゝと囚轡より乗し光仲と早出  
さしき在柄平太とていひつゝと雑兵は先と追し主卒と左右後方より平と問注所へ  
赴く程は大約その道より良賤道俗これとていひつゝと噫息歎や光仲の奥六郡は  
猛威と振ひり梟賊経任と討滅せよその恩賞は仍れど囚徒とありしは  
何れもと喜痛ありしといひぬめりありしは罪人光仲を忠常がなす  
よ問注所へ坐すに當廳の別當三善入道善信評定東大江廣元共傳ひ  
着坐し市の別當稻毛太郎の影兵は光仲を受取し忠常を還ししり  
このとて日既暮れて是光の燈燭はなほ白昼は異なりはかくて廣元  
善信の問注所の簀子の厚より光仲と召の傳へて即仰と傳へて云多賀藏  
光仲免賊征伐の功とて賞罰と恣にせよのち賊の財宝と盗ん  
為よ或は厨川の柵を燔け或は鎮守府の城を毀ち土民の口と塞んるは賊の兵  
糧と散し私恩と被け刺副將廣綱は鎮守府より逐電し公余と茂如  
芽り或は獨光仲恩賞を貪らんと相資し大功ある朝夷三郎義秀と追  
退け鎌倉へ俱しすは男廣綱と残害しと竊は骸を埋りしとこれる事  
り実かばその罪既は五逆は下れりかそのもうしとく有りて問れて光仲  
頭と擡某不肖やと亢龍の悔とていひつゝと任重く功高れば人の讒詐ある  
かん賊の兵糧とて餓る民と賑せしは暴と去く仁は帰くその義と賞















蒲殿の罪定るぬと早りと失ひえんがれば今亦情なく義邦を追  
 退けり古幕府の事ありと小悖るゆへに安立へゆく彼人の外叔父  
 されども景盛の故ありと將軍家勅當せられ久う籠居るとも又バ餘人領  
 のて衆議とも同く定めんと他をかくりて理り時政も又拒みぬを言見冠者  
 とされぬ光仲の既罪あり怒るまゝあはれ誰をたて按まれ義時  
 再び小勝を進めて原この一機ハ指毛四郎がやあけりゆりゆりその子太郎重平  
 則市の別當とるる重平も光仲が長楯と穿鑿せり又小袋坂の  
 中來る素樸の城戸を修理して事熟ら武士兩人は二百の兵を謀り守り  
 ぬく失ありとと大の機將軍家もあはれぬ言は任しえんが  
 傍難ありとと時政笑片向く寔然なりあがりと忘る共侶退き  
 魁之妻の趣を頼家卿もあはれぬ指毛太郎重平ハ光仲が長唐楯と  
 悉穿鑿せよとと凱陣の途まじり猛小袋坂は関とせを荏柄平太と仁田  
 四郎は夥の士卒と隸て守り光仲事ハ搦捕と義邦事ハ搦捕と  
 軍兵ハ追う追う追うとと搦捕とと日下晡は指毛太郎重平ハ光仲の  
 長楯と送り豪奪り夥の軍役を搦捕つととと云云と報  
 一々時政もえんがと光仲が贓罪燈扱既明白れととと身と搦捕と  
 小袋坂の淵長忠常ととと最令ととと及べり軍監佐味  
 竺内高利も光仲が邪と推懸ととと罪尤輕ととと第ハ外面十字楯  
 被けり閉塞と絶え人の出入り許さぬ光仲が使者下河邊小三郎高吉も主の非を  
 飾るととと罪高利も等ととと亦佐味が第捕籠と番卒日夜問断と  
 ら成りゆるとと獄舎は異なり皆是冤枉ととと高利が恨みゆり  
 下河邊高吉ハ廣綱の道世ととと光仲の禁獄ととと彼ととと事ととと

東夷五部卷二

二十



歎死の浅くぬ憂苦腸と断絶す身囚れ心も終く菴鳥徒は遠山と瞻望暮雲の往方と懐かしく器魚大洋の波と暮れ愁を貝綱の許す由かたは似たり強楚亡びて韓彭修られ重耳還りて介推焚きと唐山人の悼えん榮枯寵辱定めぬ人のうへ又さうへまひくく哀れかりて又その次の目も稻毛太郎重平の光仲が長唐櫃と昇りて駁の夫役と皆獄舎より牽出さるる臧物の来歴と速は首伏せよと杖と揚ぎ撲とれとも夫役ホグひ所初のどくありれば重平大く焦燥さ或ハその背を割り或ハ口は水と飲入れさかちをり夫役ホハ苛責よぬ堪は且く苦痛と脱もぬ為は彼四箇の長櫃のハ経任が財宝の是しよの来歴と定くるあつぬと神符供物の長櫃と光仲の物かびとせし偽りありと一兩人のありたる因重平ハ且よ其苛責と止む即件の趣と時政廣元善信ホ報をれば時政竊は歡びくさるバ亦光仲の責はいつやと臧物のまもるを廣綱の存亡虚実義秀がまもる明々地首伏死の罪責は火おれ氷まれの隨はせよかと憚る氣色もぬく指揮され入道善信眉も皺りて否まの様はつとあり光仲の罪ありとも冠階六位は升れ逆賊征伐の大將と死令するその身と匹夫は等しく鞭懲る律も違へり但幾通も向社所へ召すも向と禁めて傍とるれば廣元頗りか點頭入道の意見寔は是りかどのどか六國の刑法正しく又君の威徳と損をすものありん再び賢慮を旋りてと共侶は凍死の時政ハ黙然とよと又死を眠るが如く且て眼を睜開死あつて愚意も及ひて將軍家へまおせども其の首は依る太郎ハ且退治く下知と俟もその意むつとわと成死く扇杖と突立つ夫声とひく刃を起せ廣元も善信も時政の後よつて校堂へまつく件の夏の趣と頼家卿はまえあげくその處分をとませ頼家曲はまひく

光仲の責はいつやと臧物のまもるを廣綱の存亡虚実義秀がまもる明々地首伏死の罪責は火おれ氷まれの隨はせよかと憚る氣色もぬく指揮され入道善信眉も皺りて否まの様はつとあり光仲の罪ありとも冠階六位は升れ逆賊征伐の大將と死令するその身と匹夫は等しく鞭懲る律も違へり但幾通も向社所へ召すも向と禁めて傍とるれば廣元頗りか點頭入道の意見寔は是りかどのどか六國の刑法正しく又君の威徳と損をすものありん再び賢慮を旋りてと共侶は凍死の時政ハ黙然とよと又死を眠るが如く且て眼を睜開死あつて愚意も及ひて將軍家へまおせども其の首は依る太郎ハ且退治く下知と俟もその意むつとわと成死く扇杖と突立つ夫声とひく刃を起せ廣元も善信も時政の後よつて校堂へまつく件の夏の趣と頼家卿はまえあげくその處分をとませ頼家曲はまひく







こと疑ふ所の云々あるといふや賊の糧を散く餓る民と賑し賊冊と  
 燔死敗城を毀し人君のめん等閑かぬこれその器量の捷し所賞を  
 べく罰さくは彼漢土の経藉や罪の疑はれこれを免し功の疑はれを  
 賞はしむるや光仲の罪の趣疑はれを中。こを恨まあるめ、竊は陷  
 せん。夫役ホと欺はれ長櫃四箇と増加え、欽苛責の苦はなりとく。  
 証告は伏せり下郎の俗情沙汰は及ぶ。これ彼もつく光仲が薄命嘆せよふ  
 あまりあり速寛枉と釋し恩賞はこれ彼奸人の鬼胎と抱き誣者ハ  
 舌と縮むし愚按の趣がの如しと言爽は議者も免義盛能負然びて  
 莊司微妙くいれり某もそのうと。そのうと。そのうと。そのうと。そのうと。  
 あり當坐は幾言あるか。ハ是才の短はゆ多かり寔は宏論感佩せりと  
 兩人齊一稱を時政うらみく冷笑ひ平の燈据と外わく罪やといふ依估  
 あり。其の具員の沙汰はもと詰む重忠此も撓る悪と善し邪を  
 正しその辨理義はあはると依估よひ具員とり其ハ只理を推て義を  
 取の外論は。光仲果と罪あはるとの初渠と汲引せ。貴翁の孫泰時  
 ぬも。ぬれの地は措んとあはれど泰時めを弱冠かんと。理義はこりく  
 恥をあれり彼少年ハ三月の比光仲とて京都は赴は羅の館は苗のそかへり  
 あり。ハをよされり。この光仲は列ら恥せみく罪を乞入り連坐は料  
 あり。これを依估かれ具員かん誹榜の承直られ。國は曲る民を  
 と。残は勝く殺と去る免奔の與る所暴を怒く。刑は淫するハ兼討の  
 亡る所和漢の先蹤みか相同ト理義はあり。方證據はあり。光仲は外と  
 求むきといふ。時政怒りよ。堪は推向。膝は。拒。争  
 んと。程は義時ハ通と。親を隔て重忠は。對ハ流石は識者と

こと疑ふ所の云々あるといふや賊の糧を散く餓る民と賑し賊冊と  
 燔死敗城を毀し人君のめん等閑かぬこれその器量の捷し所賞を  
 べく罰さくは彼漢土の経藉や罪の疑はれこれを免し功の疑はれを  
 賞はしむるや光仲の罪の趣疑はれを中。こを恨まあるめ、竊は陷  
 せん。夫役ホと欺はれ長櫃四箇と増加え、欽苛責の苦はなりとく。  
 証告は伏せり下郎の俗情沙汰は及ぶ。これ彼もつく光仲が薄命嘆せよふ  
 あまりあり速寛枉と釋し恩賞はこれ彼奸人の鬼胎と抱き誣者ハ  
 舌と縮むし愚按の趣がの如しと言爽は議者も免義盛能負然びて  
 莊司微妙くいれり某もそのうと。そのうと。そのうと。そのうと。そのうと。  
 あり當坐は幾言あるか。ハ是才の短はゆ多かり寔は宏論感佩せりと  
 兩人齊一稱を時政うらみく冷笑ひ平の燈据と外わく罪やといふ依估  
 あり。其の具員の沙汰はもと詰む重忠此も撓る悪と善し邪を  
 正しその辨理義はあはると依估よひ具員とり其ハ只理を推て義を  
 取の外論は。光仲果と罪あはるとの初渠と汲引せ。貴翁の孫泰時  
 ぬも。ぬれの地は措んとあはれど泰時めを弱冠かんと。理義はこりく  
 恥をあれり彼少年ハ三月の比光仲とて京都は赴は羅の館は苗のそかへり  
 あり。ハをよされり。この光仲は列ら恥せみく罪を乞入り連坐は料  
 あり。これを依估かれ具員かん誹榜の承直られ。國は曲る民を  
 と。残は勝く殺と去る免奔の與る所暴を怒く。刑は淫するハ兼討の  
 亡る所和漢の先蹤みか相同ト理義はあり。方證據はあり。光仲は外と  
 求むきといふ。時政怒りよ。堪は推向。膝は。拒。争  
 んと。程は義時ハ通と。親を隔て重忠は。對ハ流石は識者と

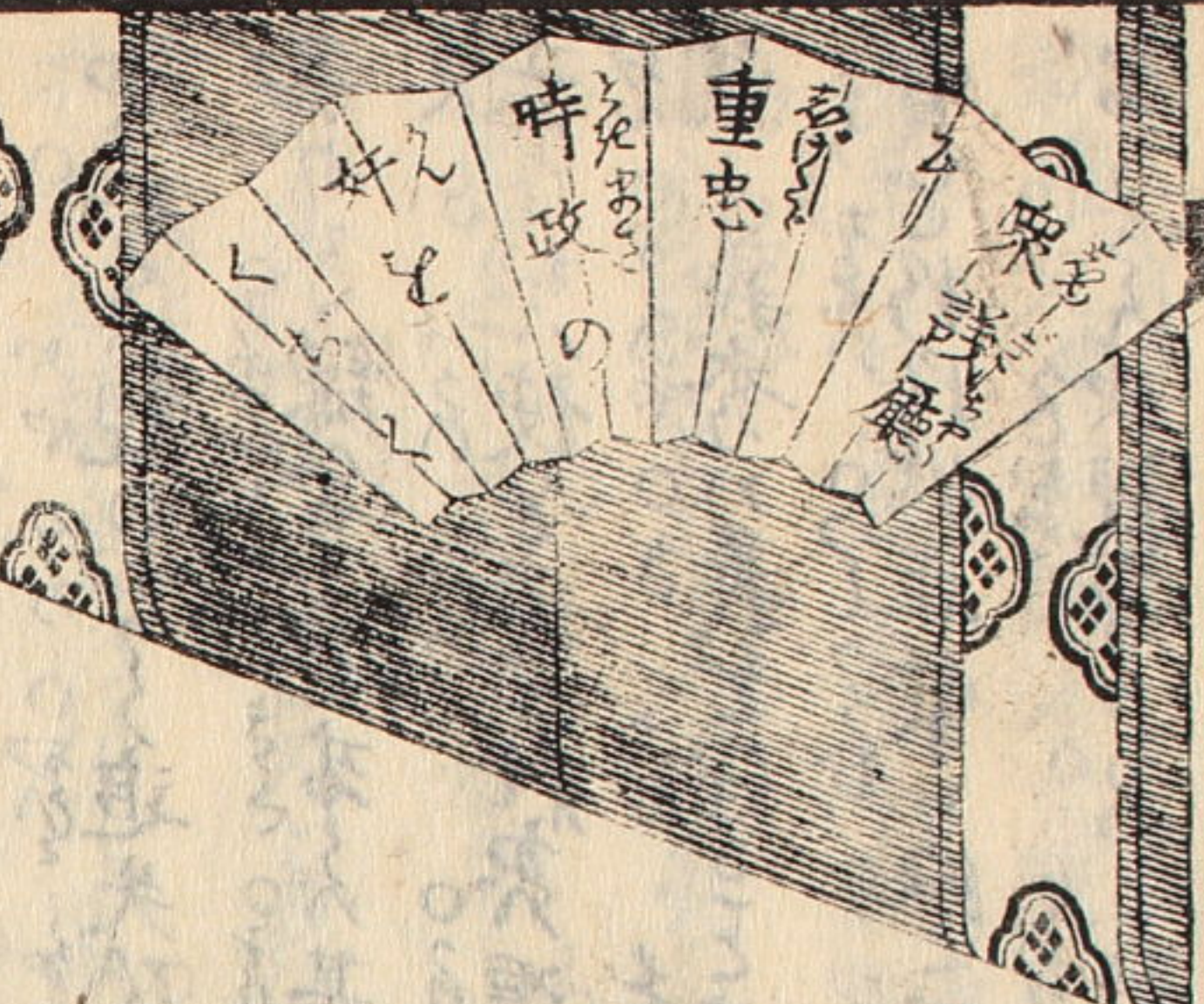












北條時政

比企重忠



北條時政

比企重忠

秩父重忠







せあり死の現るものやんあ時政まこれごとく経任の遠くは梟首  
 せられんや勿論但時夏が首梟まこの故の渠の初経任誅伐の副将  
 ううふその戦ひ利のたてて賊降るものあ余今経任ふとひとこれ  
 梟のれこれ君の恥辱と世は披露するは似うこの残の要あらん  
 拒むと重忠推返して君子の過は日月の蝕の如く人皆これより更れ人皆を  
 仰ぐ時夏が叛逆の経任の倍をとり何とれが渠の君恩と仇め賊を資け  
 御方と賣く脱れう原御家臣うあうこれと梟首せどこのごとく君の  
 むん恨と飾ふはく公の亦只君の人のを執推もこれらの残といふ  
 して脱とあり再三評議と礙しと辞と喝して討論はの忠勇推し怕  
 しく碌の為と針ま世は有るは直言かれは時政のやく後と言果  
 べくもあられが廣元善信これと和解するの残も亦決しと憲断をよめ

とて両人軀ての趣をむとくは免あがら頼家卿もしく時政が意は背死  
 ごとく案に煩ひあひて且して宣あうその評議はのさかた光仲ふが人の  
 かれが逆賊ホと梟首のたのめく例と勘て後日あうし形とて又義邦主後  
 領くべに在柄平太胤長越中へ遣して義秀を徴し死和田新左衛門常盛  
 中を今日御教書を賜らん廣元善信奉り形のとく形とて光仲うの  
 義盛も仰ぐが今さう違背まふあはるの餘満るうあはるかと相討  
 集會はこれあやんはとてあく暇をあうの近習は翠簾をぬきさう  
 後堂へど入りぬ時政これ面を起してひう竊は笑しはよとむうふ形を  
 起して大紋の袖引繕ひ悠としく先は立は廣元善信義盛能負重忠も  
 義時も送は辞讓の威儀正しくうあつれ立てて退出る

朝夷巡鳴記全傳第五編卷之二終



